



Title	離島エコツーリズムの社会学：「生活」の視点から
Author(s)	古村，学
Citation	大阪大学，2009，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49448
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【13】

氏 名	こむら まなぶ 古 村 学
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）
学 位 記 番 号	第 2 2 6 3 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	離島エコツーリズムの社会学ー「生活」の視点からー
論 文 審 査 委 員	（主査） 准教授 山中 浩司 （副査） 教 授 厚 東 洋 輔 教 授 川 端 亮

論 文 内 容 の 要 旨

本稿の目的は、離島の日常「生活」という視点からエコツーリズムを読み直すことにある。それは、現代社会におけるグローバルなエコツーリズムの意味をローカルな地域社会の現状から分析する視点を提示することへとつながる。

離島、とくに外界に位置し遠隔地にある離島は、海に囲まれ、政治や経済の中心部から隔絶しており、社会規模が小さいという特質をもつ。このため開発圧を逃れており、その結果、自然環境が保存され、エコツーリズムへの可能性が多く存在する。また日常的に自然との距離が近く、グローバルな自然観とは異なった、独自のローカルな自然観が構成されていると考えられる。エコツーリズムを構成しているグローバルな自然観と「生活」にもとづくローカルな自然観との間には、相互作用や葛藤が多様な形で現れている。そこで本稿では、離島社会におけるエコツーリズム実践を事例に、地域の現状を理解するための綿密なフィールドワークにもとづく実証的研究と分析を行っていく。

第1章「現代社会と観光」では、社会学や人類学における観光研究の基本的な成果をたどりながら、地域社会がどのようにあつかわれてきたのかを検討し、本論文の方向性を示す。エコツーリズムなどの新しい形態の観光では、従来型のマス・ツーリズム開発への批判から、地域社会への貢献が重視されている。観光研究においてもこうした事情を反映し、地域社会や地域住民を視野に入れた分析が増加している。これらの研究のなかには、エコツーリズム実践の成功例の報告や観光開発の問題点改善のための政策提言を行う系統の研究と、エコツーリズム自体がはらむ問題点に焦点化する理論ベースの研究があるが、そこでは、地域社会の一部を切り取って見ていることが多く、地域で「ふつつ」に暮らす人々の姿は見えてこない。本論文では、当該地域での日常「生活」における自然とのかかわり、そこから発する自然観を明らかにすることをとおして、エコツーリズムを読み直すという視座を提示する。

第2章「離島社会と観光」では、統計データから離島社会と離島観光を概観することによって、それらの全体像を示す。現在、離島社会の多くは、過疎高齢化、産業の不振に悩んでいる。一般に「隔絶性」「狭小性」という特徴もつ多くの離島社会では、輸送コストの高さや面積や人口規模の問題から産業発展が阻まれ、人びとが島を離れるというかたちで過疎高齢化が進行する。こうした離島の現状について具体的な統計データを示し、残された自然を資源とした観光が産業として重要性をもつことを指摘する。さらに離島の「隔絶性」「狭小性」という

特徴から「離島性」という指標を構成し、さらに「観光依存度」という指標とともに離島を4つに分類するタイポロジーを作成する。このタイポロジーにより本研究の調査地を特徴づけておく。

第3章「離島観光の系譜」では、島根県隠岐諸島島前西ノ島を事例として、離島観光と離島政策の変遷、および離島からの対応の変遷を追うことによって、離島にとっての観光と政策の意味を明らかにすることを目的としている。西ノ島は、過疎高齢化、産業の不振に悩む典型的な離島である。ここでの観光への取組みを大きく二期にわけてとらえておく。前期は、戦後すぐから60年代の国立公園指定、その後の離島ブーム等の観光発展期である。この時期は、離島振興法による開発の進展により生活状況の改善が実現した時期とも重なっており、実質的には観光への取組みは便宜的な生活改善手段として意識されている。後期は、オイルショック以降の西ノ島観光の停滞期である。漁業の不振や観光客の減少により、西ノ島では地域社会を成り立たせる産業を模索している。そのなかでもやはり観光は重要な選択肢であるが、深刻な過疎高齢化、政策的に主体性を奪われてきた中で、対応するのが困難な状況となっている。

第4章「エコツーリズムと自然保護」では、沖縄県八重山諸島西表島を事例として、エコツーリズムにたいする島民の対応とその意味を、自然保護とのかかわりおよび日常生活から明らかにすることを目的とする。西表島は、日本におけるエコツーリズムの先進地域であり、成功地として知られている。そのエコツーリズム活動は、二つの方向性をもつものとしてとらえておくことができる。一つは、現在の西表観光を支えるカヌー・ツアーであり、もう一つは、西表島の伝統や文化、それと結びつく自然をもとにしたエコツーリズムである。これらは大別すれば、近代西欧を起源とした生態学的「知」に基盤をおく自然保護運動の流れと、西表島の生活と伝統に根ざした民俗学的「知」に基盤をおくエコツーリズムの二つに分けられるが、島民たちからは両者ともにある種の「距離感」をもってむかえられている。こうした状況の分析をとおして、西表島におけるエコツーリズムの意味を論じる。

第5章「エコツーリズムと都会意識」では、東京都小笠原諸島父島を事例として、日常生活における自然とのかかわりによって生まれた自然観から、小笠原におけるエコツーリズムの意味を明らかにする。小笠原諸島は、日本におけるコツーリズムの発祥の地といわれており、現在は東京都の主導によりエコツーリズムが推進されている。観光産業は島の主要な産業である。そして、島民は自然保護やエコツーリズムの方向性には、おおむね賛同している。小笠原社会の特徴は、歴史的、制度的に生業、住居などの日常的な活動における自然との接触が制限されており、日常的な自然体験は、観光客と同様のレジャーとしての接触に限られているということにある。ここから生まれる自然観は「都会」的なものであり、グローバルな自然保護およびエコツーリズムにおける科学的な自然観とは、表面的には葛藤が少ない。しかし、科学的な自然観とレジャーとしての自然観とは、かならずしも一致しないことには注意が必要である。

第6章「エコツーリズムと生活」では、沖縄県南大東島を事例として、観光研究者主導による、住民参加型の「理想的」なエコツーリズム計画のプロセスおよび計画に対する住民の対応をとりあげる。そのうえで、住民の対応の理由を、日常生活における自然とのかかわりから生まれる自然観から考察する。南大東島は、無人島を切り開き、島全体を開拓したサトウキビの島である。製糖産業が主要産業として成立しており、観光産業は小さな規模にとどまっている。しかし、地質学的、生態学的に貴重な資源が豊富であり、エコツーリズムを発展させる可能性を秘めている。この貴重な資源を活用するために「理想的」な住民参加型エコツーリズム計画が実施されたが、島民たちにはまったく関心をもたれていない。島民にとって、島の自然とは、よりよい生活をするために変えていくものであって、自然保護活動をするのもそのためである。この自然意識は、貴重だから保護するというグローバルなエコツーリズムや自然保護とは大きく異なっている。

そして「おわりに」では、これまで見てきた4つの島における、日常「生活」および自然観の多様性を比較検討することにより、観光研究および地域研究へのあたらしい視点を提示する。離島における日常「生活」、そこか

ら生まれる自然観は、グローバルな社会状況から大きな影響を受けるとともに、その地域のおかれた歴史的、社会的条件によって決定される。ローカルな条件の相違が、グローバルな規定性を越え、離島における多様性を生み出し、エコツーリズムに対する住民の態度の相違へと結びついている。こうした現代における日常「生活」の視点から、エコツーリズムや自然保護活動を取りまくグローバルな状況と地域社会のローカルな条件との対立、葛藤、調和といった多面的な相互作用を分析することが重要である。そのことによって、地域社会の観光への組織みのなかの理想的な一部を切り出し、小さな主体性として称揚し住民像を理想化するのではなく、地域社会の実像に近づくことが可能になる。この実像からこそ、地域社会の現実に根ざした新たなエコツーリズム研究へ向かうことができるのである。

論文審査の結果の要旨

申請者、古村学の課程博士学位申請論文『離島エコツーリズムの社会学―「生活」の視点から―』は、申請者が2001年から2007年にかけて、フィールド調査を行った四つの離島、島根県隠岐諸島西ノ嶋、沖縄県八重山諸島西表島、東京都小笠原諸島父島、沖縄県大東諸島南大東島、の事例を中心に、近年僻地観光の切り札として注目されているエコツーリズムと地域住民の関係を扱った意欲的な論考である。

申請者は、まず、20世紀後半の社会学、人類学、経済学における主要なツーリズム研究を概観し、マスツーリズム批判からオルタナティブ・ツーリズム提唱にいたる潮流の中にエコツーリズムの動きを位置づけている。エコツーリズムについての従来の研究が、成功例を検討した政策的なものと、エコツーリズムが抱えている原理的な困難を指摘する研究に二分されている中、地域住民から見たエコツーリズムについての詳細な調査研究は少なく、この点に申請者の研究の貢献があるとする。申請者は、このための素材として、離島におけるエコツーリズムを取り上げ、地理的経済的性格の異なる四つの調査地を提示している。

これらの調査地の特性を示すために、申請論文では、日本における離島の地理的経済的社会的状況が概観され、その中での各離島の位置づけを明らかにするために、「離島性」と「観光への依存度」という二つの指標が設定される。近隣の市制都市へのアクセス、人口あたり民宿数などの統計から、四つの調査地の特性がそれぞれ、隠岐諸島西の島＝離島性弱・観光依存度弱、八重山諸島西表島＝離島性弱・観光依存度強、小笠原諸島父島＝離島性強・観光依存度強、南大東島＝離島性強・観光依存度弱と特徴づけられている。地理的経済的特性が異なるこれらの離島において観光やエコツーリズムが住民にとってどのような意味をもつのかを詳細に検討したものが、本論文の中心部分をなす。

申請者は、まず、隠岐について、戦後の離島観光ブームとその後の急速な衰退を中心に、観光と離島生活の関連を論じ、過疎高齢化する離島にとって観光化する道が必ずしも必須の道ではない点が指摘される。隠岐と同様に都市部からそれほど遠隔ではないが、しかし、はるかに観光への依存度が高い西表島は、日本におけるエコツーリズム先進地と呼ばれているが、申請者は、西表島のエコツーリズムが、自然保護と伝統文化保護の二つの異なる側面をもつこと、こうしたいずれの側面についても住民の反応は一定の距離感をおいたものであることを指摘し、その原因として、住民の多くが外部からの移住者であること、一部の運動家や外部の研究者によって島の「自然」が占有されているという意識をあげている。他方、小笠原諸島においては、申請者は、島民の自然に対する意識が観光客のそれにきわめて近いことを指摘し、いわば都会的な離島生活が成立していることを重視する。住民の多くが移住者であり、人間関係も都会的な非干渉の関係であることが、かえって、小笠原におけるエコツーリズムが成立しやすい条件を生み出したと申請者は指摘する。最後に、申請者は、南大東島におけるエコツーリズムに対して、島民の多くがノン・コミットメントの態度をとる理由を分析し、島民の自然観とエコツーリズムの自然観の間の懸隔を指摘する。

こうした論考を通して、申請者の論文は、グローバルに展開されるエコツーリズムや自然保護運動と、地域住民の間には、重大な相違が存在することを指摘しながら、地域住民にとってのエコツーリズムの意義と可能性について論じている。その過程で、浮かび上がる問題は、「住民」とは一体誰なのか、「自然」とは誰にとっての自然なのかといったきわめて原理的な問題であり、観光研究、地域研究双方にとって重要な知見を提供するものと思われる。以上から、本論文は博士〔人間科学〕の学位授与にふさわしい業績と判定する。